神戸新聞 2025年03月18日 火曜日 面名 発言１ １４ 5ページ

# 最後だとわかっていたら

日々小論

論説副委員長　長沼隆之

「いってらっしゃい」。朝、私はどんなに慌ただしくても、小学校に出かける8歳の娘に声をかける。幼稚園の頃から続けているが、言わないと、見送らないと気が済まない。

そんな当たり前のこと…と思われるかもしれない。でも、それがいかに大事かを強く意識させられたきっかけがある。

東日本大震災で甚大な被害が出た岩手県の地元紙、岩手日報社が2017年から毎年3月11日に「最後だとわかっていたなら」をテーマに展開する新聞広告や映像を目にしたからだ。

ある男性が語る。ささいなことで新婚の妻とけんかをした。朝、妻に「いってらっしゃい」と言われたけど、ただドアを閉めて出て行った。それが津波にのまれた妻との最後になった。男性は「ごめんなさいしかないですね」と涙を拭う…。

被災地には同様の悔恨を抱える人が少なくないという。映像を見た私は衝撃を受けた。そして思った。大切な人とは、きょう話そう。朝出かけるわが子と話すのが最後になると、わかる人はいないから、と。

企画に携わった同社総合ビジネス局次長の柏山弦さんは「被災地外の人たちの心にも刺さる普遍的なメッセージを出すことで風化を防ぎたい」と話す。

この企画は、全国各地の学校で「家族や友人など大切な人へ感謝を伝えることの大切さ」などを学ぶためのツールとして活用されている。同社は今年、道徳や防災教育の教材としての学習指導案をつくり、ホームページで無料公開を始めた。

「明日が来ることは当たり前ではない」と知ったあの日。被災地で起きた無数の悲劇と後悔を通して大切な人の存在を思い出し、未来の防災につなげる。命の重みをかみしめる。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。